どうしてイエスは最後まで愛することが出来たのでしょうか。

　イエスの愛の偉大さとその力強さを知った人が、その愛の源について問いかけたり、その愛そのものをもっと深く理解したいと求めたりしても、不思議なことではないと思い
　ます。どうしてイエスは、それだけ大きな苦しみの中にも愛し続けることが出来たのでしょうか。どうしてイエスは、それだけ大きな苦しみを与えた後にイエスを殺したあの人さえも愛することが出来たのでしょうか。このような問いに対する答えを聖書の中で見出すことが出来ます。

イエスの発達

> 「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」（フィリ2,6-8）

　イエス・キリストは受肉された神のことばであり、神の永遠の御独り子で、三位一体の神の第二ペルソナです。けれども、聖書やカトリック教会の教えによれば、凡そ 2000 年前に、ベツレヘムで生まれたイエスが完全な愛をもって、最後まで愛することが出来たのは、その身分のためであったわけではありません。第二バチカン公会議の「現代世界憲章」の中には、イエスについて次のように書いてあります。「キリストは人間の手をもって働き、人間の知性をもって考え、人間の意志をもって行動し、人間の心をもって愛した。かれは処女マリアから生まれ、真実にわれわれのひとりとなり、罪を除いては、すべてにおいてわれわれと同じであった。」
　イエスの神秘、特にイエスの愛の源を知りたいならば、イエスは罪を除けば、わたしたちと同じ人間であったという事実を真剣に受け止めなければならないと思います。

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」（ヘブ 5,8-10）

イエスは確かに優れた人間でありました。そしてそれだけではなく、辛い苦しみの中にも愛することの出来る完全な人間になりました。けれども、最初からそうであったわけではありません。福音者ルカは、イエスの子供時代について書いたところに、イエスが他の人と同じように発達したということを強調しています。イエスは背丈だけではなく、知恵も、神と人間に対する愛も成長していきました。それから、福音者マタイは、イエスの人生に起こった大きな変化について書いています。この変化は、それを見たナザレの人々、つまりイエスのことを子供の時から知っていた人々を非常に驚かせるほど以外なものでした。この変化はナザレの人たちにショックを与え、彼らがそれをなかなか認めることが出来ずに、イエスを殺そうと図ったほど大きなものであったということまで言えると思います。

参照：ルカ 2,39-52

「故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」マタ 13,54-56

ユダヤ人の習慣に従って、イエスは 12 歳の時から、ナザレの他の男性と一緒に安息日に会堂に集まり、聖書を朗読し、それについて話し合ったり、分かち合ったりしました。30 歳のイエスの言葉への人々の反応を見て、その時まで、イエスの話し方や振る舞い方は普通であって、イエスはナザレの他の人と同じように話し、同じようなことをしていて、特に目立つようなことがなかったというように推測することが出来ると思います。人々は、イエスのことを、特別な知恵や力ではなく、大工の職業と結び付けていました。けれども、今は、イエスが知恵の言葉を語り、奇跡を行う力を持っています。皆は不思議がっていて、大工の息子が元々持っていなかったこのような知恵や力をどこから得た

かと問いかけていました。
　イエスの変化は、その言葉や行いに影響を与えただけではなく、イエスの生き方を全面的に変えました。イエスはナザレに残らず、今まで住んでいた家とヨセフから受けついだ仕事を捨てて、旅立ちました。そしてパレスチナを巡り歩きながら、神の国についての良い知らせを力強く権威をもって宣べ伝える先生として生きるようになりました。このような変化はいつ起こったのでしょうか。それを起こすものは、何だったのでしょうか。
　福音を一度でも読んだことのある人なら、この変化はイエスが洗礼者ヨハネから水の洗礼を受けた後に起こったということが分かるはずです。けれども、宣教活動や受難の時に現われたイエスの愛の源を知るために、イエスが洗礼者ヨハネから受けた洗礼の意義とその洗礼に伴った出来事の意義を理解する必要があると思いますので、次回はこれについて考えてみたいと思います。

参照：マコ 6,1-6、ルカ 4,16-30

イエスの洗礼

イエスが使命を受け入れて、それを始める

> 「アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。」ルカ 3,2-3

　洗礼者ヨハネが授けた悔い改めの洗礼は、罪の告白と神の掟を守る、つまり神のみ旨に適って生きるという決心が伴う償いの儀式でした。この洗礼を受ける直接の目的というのは、メシアの到来のための準備でした。イエスは罪を犯したことがなかったし、イエス自身がメシアであったので、この洗礼を受ける必要がありませんでした。洗礼者ヨハネの周りに集まっていた（マタ 21,32）大勢の罪人の中に入ることは、完全に清い方であって、罪を憎んだイエスにとって非常に苦しいことであったはずです。
　洗礼を受けるために近づいたイエスを見た洗礼者ヨハネが驚いて、イエスの依頼を断ろうとしたとき、イエスはこう言われました。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」（マ

タ 3:15）イエスが言われた「正しいこと」というのは、父である神のみ旨を行うことに他ならないでしょう。イエスは罪びとの中に入られて、彼らと同じように悔い改めの洗礼を受けられた、つまり償いの儀式を行ったのは、父である神がそう望まれたためでした。神が求められたのは、イエスがあがないの業、つまり人間を罪の奴隷状態から解放する業をこのように始めるということでした。

度々イスラエルの民と愛の契約を結ばれて、何回もイスラエル人の罪を赦した神は、罪人さえも愛しておられることや、罪を犯した人は、この罪を痛悔し、それから離れたいと望めば、必ず赦してくださると示されました。同時に、イスラエル人が絶えず神と結んだ契約を破ったり、罪に戻ったりしたことによって示したのは、人間が完全に心を開いて神の愛を永久に受け入れることがなかなか出来ないということでした。そのために、人間は神と和解することが出来ないわけです。または、イスラエル人の歴史が示しているのは、人間には、神の愛に愛をもって応えることが出来ないということでした。結果として、人間は神と一致して、自分の存在の目的に達することが出来ないわけです。そのような人々のところに神はイエスを遣わして下さいました。神が御独り子をこの世に遣わされたのは、彼が人間になって、つまり人間性を受け入れることによって、すべての人と結ばれてから、全人類の名によって、それとももっと厳密的に言えば一人ひとりの名によって、罪の暗闇の中から神の愛に愛をもって応えるためなのです。これによって神と人類との間の和解が実現されること、つまり永遠に続く新しい契約が結ばれることが計画されていたわけです。同時にイエスは神の愛に忠実に生きることによって、あらゆる罪を赦すことの出来る神の愛、または、人間をあらゆる罪の奴隷状態から解放することの出来る神の愛をすべての人々に現すことを神が望まれました。そのために、イエスが悔い改めの洗礼を受けた瞬間は、神がイエスを罪びとの手に引き渡す瞬間であると言えるわけです。または、イエスの方から考えれば、それは、全人類の罪の結果を受け入れなければならないということ、それから預言者イザヤが預言した通りに罪人の手の中に苦しむ僕になるということをはっきりと意識しながらイエスがこの使命を受け入れる瞬間でした。イエスにとって悔い改めの洗礼を受けるということは、神の小羊の役割を受け入れる、つまりすべての人の罪のためのいけにえになるということを意味しました。そのために、それはイエスのへりくだりの瞬間でもあったと言えます。この意味では、水の洗礼は、血の洗礼、つまりイエスのもっと大きなへりくだりであった十字架の死を先取りしているということまで言えます。

参照：　マタ 3,13-17；　ヨハ 1,29-34

イエスの使命とその本性が公に現される

「わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」ヨハ 1,31

福音者マタイが伝えているように（マタ 3,16-17）、イエスの愛と信頼に満たされた謙遜な態度に応えて、父である神は人間が罪を犯した結果として閉じてあった天を開き、聖霊を送り、イエスがご自分の愛する子であることを公に宣言されました。開かれた天は、イエスにおいて罪に満たされた人間の世界に神が決定的に入られたことを示します。イエスはその従順によって、あらゆる状況において、例えそれに苦しみが伴っても、父のみ旨に忠実に従う息子の生き方を承諾されたことによって、父に対する愛と信頼を表しました。この愛と信頼のために、罪に満たされた世界、サタンの王国であると言われていたこの世界（ヨハ 13,31; 14,30）に生きても、イエスは常に父である神と繋がっていました。ですから、イエスがこの世に来られてから天と地を繋げていたということが言えるわけです。最終的に、イエスは十字架上の愛の奉献によって人間と神の間にあった垂れ幕を破って（マコ 15,38）、神と人間を永遠に切れることのない絆で結びました。

旧約時代に預言者たちは、その活動を始める前に必ず油を注いでもらっていました。油を注ぐという儀式は、この人たちが神によって選ばれ、神によって遣わされたことのしるしでした。イエスは聖霊によって油注がれた者となりました（使 10,38）。このことによって、神はイエスを選び、彼をメシアとして遣わしたということを示してくださいました。聖霊がイエスの上にとどまったときから、イエスは全人類のために聖霊の源となりました。イエスが行った各々の奇跡やイエスが語った一つずつの知恵の言葉は、この聖霊の降臨を反映するようなものになっていました。言って見れば、イエスご自身が「天の破り」となり、贖いの業が実現されたときから、世の終わりまで、神はその「破り」を通して聖霊を、つまりご自分の命と愛を送ってくださっています。

イエスの他に、少なくともあともう一人の人が降ってくる聖霊を見ました。それは洗礼者ヨハネでした。ヨハネはメシアを迎えるために準備の出来た数少ない人の中の一人であった為、自分のところに近づいて来るイエスがメシアであるということが分かりましたので、このしるしを必要としませんでした。けれども、確かに、このしるしが彼の確信を固めたに違いないと思いま

す。そしてこの体験のためにヨハネは次の証しを立てることが出来ました。「わたしは、「霊」が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『「霊」が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた」（ヨハ 1,32-33）。このしるしは、人々がヨハネの証しをより簡単に信じて、イエスに従うことが出来るために必要なものでした。

聖霊がイエスの上に降った後に、次の声が聞こえました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（マタ 3,17）。これによって父である神は、イエスの最も深い神秘、イエスの最も深い本性（アイデンティティ）を公に現してくださいました。それは、マリアの息子であるこのイエスが、同時に全能の神の子であり、神の望みに完全に適って生きる方であるということでした。

開かれた天、聖霊の降り、父である神の宣言は、罪と悪に対する完全な勝利の約束であり、救いの業の実現の約束でした。この体験は、イエスにとって、父から与えられた使命を果たすため、すなわち罪人の手に引き渡された今から最後まで彼らの間にとどまるために、または彼らの手からあらゆる苦しみや残酷な死さえも受け入れるために必要な希望と力の源になったことでしょう。今は、イエスの使命とその本性が公に現されたために、イエスが神によって遣わされた者として、又、聖霊によって洗礼を授けることの出来る者としてその活動をし始めることが出来るようになりました。しかし同時に、サタンとその他の神の敵の攻撃も可能なものになりました。

イエスがメシアであると分かったサタンはすぐにイエスを襲い始めました。サタンの誘惑に対してのイエスの応答は、イエスの使命の特性、またはイエス自身が神の子であるということをどのように理解したかということを現しています。サタンは、神の子であるということが、苦しむということではなく、逆に何かの特権を持つことであるとイエスに思い込ませようとしました。そのために、イエスが神から自分の問題を解決してもらうこととか、あらゆる苦しみを遠ざけてもらうことを要求するように提案しました。それから、サタンは、イエスが世界を支配したいならば、何かの辛い働きをするのではなく、この世の支配者、すなわちサタン自身の前に平伏すだけで十分であると、イエスを納得させようとしました。このような誘惑によってサタンは多くの人々にとって神の計画よりも魅力のあるように見える提案を与えて、イエスを神が示してくださった道から逸らそうとしたわけです。

イエスは、このような誘惑をすべて退けました。なぜなら、神の子であるということは、何かの特権に基づいて、特別な扱いをされたりすることではなく、

それは父である神との愛の交わりに生き、常に自分の意志を父の意志と一つにすることであるということを知っていたからです。イエスは、御独り子が人々に仕えることによって彼らに父の愛を現し、そして彼らを父のもとに引き寄せることを父が求めておられるということも知っていました。父との一致を保ちたいという揺るがないイエスの望み、または父から与えられた使命を忠実に果たしたいという何よりも強い望みは、自分が神の子であるというイエスの意識によって生み出されたものでした。こうして、神の子としての本性は、イエスのすべての望み、すべての考え、すべての行いを形作るものだったわけです。ナザレで見極められたこの本性は、イエスにとって力の源でありながら、勇気と自由の源にもなっていたということも言えるでしょう。

参照: マタ 6,25-33、ヨハ 5,17-20、 マタ 26,63-68

イエスの自己認識と自己同一性の発達

> 「それから彼は彼らと共に下って行き，ナザレに来た。彼は彼らに服していたが，彼の母はこれらのすべての言葉を自分の心にとどめた。そしてイエスは，知恵と背丈においても，また神と人からの好意においても，増し加わっていった。」ルカ 2,51-52

四つの福音書は、イエスの写真というよりも、別の画家が描いたイエスの肖像のようなものです。福音記者たちは、異なる状況に生きていて、異なる問題に直面していた共同体のためにその福音書を書き記しましたので、この共同体にとって特に重要であると思ったイエスの性格の特徴とか、イエスの教えの側面を強調したり、その教えの意味を良く理解してもらうために、順序や表現を変えたりしました。そのために、四つの福音書において色々な違いが見られますが、この違いはイエスを知るために妨げになっているのではなく、逆にイエスの姿をより豊かにするもので、イエスを知るのに大きな助けとなっています。

マルコによる福音書において、「メシアの秘密」というのがあります。イエスは人々が早すぎて、つまり十分に準備される前に、ご自分が神の子でメシアであるということを知らない方がいいと思っているようです。そのために人々の前に自分の本性を隠していますし、ご自分の本性を知っていた悪霊に、また、自分のことを知った人に、それを言い広めるのを禁じます。弟子たちは、イエスがメシアであるということをイエスがガリラヤでの活動を終

わり、エルサレムに向かう旅をし始めるとき、つまり福音の後半でやっと分かるようになります。イエスが神の子であるということを、イエスが生きているうちには、誰一人分かりませんでした。イエスが亡くなってすぐにただ一人の人がそれを分かりました。それは、イエスの弟子ではなく、ローマ人の百人隊長でした。恐らく、マルコは、自分の共同体のキリスト者たちに、イエスと共にいた人たち、イエスの行いを自分の目で見てイエスの話しを自分の耳で聞いたその人たちでさえ、イエスが誰であるかということを最初から分かったのではなく、イエスに従う内に少しずつ分かって来たということを示すことによって、このキリスト者たちも、イエスが誰であるかということをまだ良く分かっていないが、イエスに忠実に従えば、段々と分かるようになるということを教えたかったのではないかと思います。歴史的に見ても、マルコが教えた通りに、使徒たちさえ三年間イエスと共に生きても最後まで、イエスのことを理解していませんでした。彼らは、聖霊を受けて、イエスが復活したという出来事を通して、イエスと共にいた時の体験を振り返って見て初めて、イエスのことが分かりました。しかし、すぐに完全に分かったのではなく、与えられた使命を果たし、分かったことを宣べ伝えながら、彼らの理解が深まっていきました。イエスのことを理解するこの過程は、もうすでに二千年以上続けていますが、イエスのことが完全に分かったと言える人はいないはずです。今でもイエスは神秘的な存在であり続けています。

マルコが以上のようにイエスのことを描いていますので、マタイやヨハネと違って彼は、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けた後に起こった出来事を、イエスの本性とイエスの使命が公に現された出来事としてではなく、イエスの個人的な体験として描いています。この福音書の中で、神は直接イエスに向かって次の言葉を語ります。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」（マコ 1,11; ルカ 3,22）。マルコは、この声が誰かに聞こえたとか、イエスの上に降る聖霊を誰かが見たということを書いていないので、洗礼者ヨハネも、周りにいた人たちも、何か特別なことが起こったということに気が付かなかったというような印象を与えています。恐らくマルコは、イエスが公活動を始める前に体験したことをこのように描くことによって、神をご自分の父として、または、自分自身を愛されている神の子として認識することが、要するに自分の本性を知って、それを自分の最も重要なアイデンティティとすることが、イエスの人生において決定的なことであり、イエスの活動の中に見られる力を与えるものであったということを伝えようとしていると思います。

イエスは、罪以外に私たちと同じ人間であり（フィリ２,６-8; ヘブ 4,15-16）、わたしたちと同じように成長し、発達していたので、地上の人生の初めから自

分の本性を知らなかったということを自信を持って言えると思います。そのために、イエスは、自分が神の子であり、メシアであるということをいつ、またはどのように知るようになったかという問いが根拠のあるものであるだけではなく、イエスのことを理解するために非常に大切なことになります。現代の聖書学者の中に、マルコとルカが伝えた言葉によって神はイエスに彼の本性を現したと考えている人がいます。この学者たちによれば、イエスは洗礼を受けた後に初めて、自分が誰であるかということと、神が自分に与えた使命を知りました。そのために、この体験がイエスの人生を変えたと考えています。けれども、そのような考え方は、十二歳のイエスが神殿に残って、律法学者たちと話しをしたという福音記者ルカによって描かれた場面に合いません。なぜなら、すでにその時、イエスは神が自分の父であるということ、または、父から与えられた使命を果たすことが何より重要であると知っていたということを現したからです。

けれども、自分の本性を知っていても、十二歳のイエスは神の子として生き、メシアの活動を開始するのではなく、両親と一緒にナザレに戻り、後十八年間もヨセフの家に住み、ヨセフの仕事をしています。恐らく、イエスは十二歳の時に、自分の本性や使命を知っていても、まだ神の子として生き、メシアの使命を果たすことができなかったと推測することが出来ると思います。自分の本性を忠実に生きるために必要であったこの十八年間をルカが次の通り描いています。「それから彼は彼らと共に下って行き，ナザレに来た。彼は彼らに服していた・・・そしてイエスは，知恵と背丈においても，また神と人からの好意においても，増し加わっていった」（ルカ 2,51-52）。それは、非常に手短い描写ですが、その期間の本質を理解するために十分です。

最初に出された準備期間の一つの特徴というのは、従順です。それは、両親に対する従順、特に「恵み溢れる方」への従順でしたが、この従順は神への従順を現しています。ヘブライ人への手紙の中に書いてある言葉によれば（ヘブ 2,8）、この従順のためにこそ、イエスが完全な人間になりました。後ほどイエスは、「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリ 2:8）が、恐らく、子供の時代にそれは、自分の身分から生じる責任を果たすことであったでしょう。イエスは、まずマリアの子で、大工の息子として育てられましたので、イエスにとって従順というのは、懸命に大工という肉体労働をすることでした。同時に、イエスは、ダビデの子孫で、ガリラヤのナザレの住民、ユダヤ教の信徒でした。そのために、イエスにとって従順とは、モーゼの律法を守ること、色々な習慣に従い、定期的に祈りを

すること、聖書を読み、それを暗記すること、ナザレの会堂で毎週行われた集会に参加すること、毎年エルサレムの神殿へ巡礼し、祭りに預かることでした。神への従順は、「神への畏れ」を現しています。そして、「主を畏れることは知恵の初めです」（詩 111,10;　シラ 1,14-20）。知恵の書（知 8,4）によると、真の知恵は神の神秘を知ることであります。この知恵を持つ人は神の善を現すことができます。そのような発展によってイエスは人間として成熟していました。そして何よりも大切なこととして、段々と神が求めているような人になり、神との愛の交わりを深め、益々神との愛の絆を強めていました。そのような発達の結果として、イエスは、自分が神の子であると強く自覚し、それはイエスにとって最も深い自己認識と同時に最も重要な身分になったので、神の子と名乗りきることができました。イエスは十字架上で完成されましたので、その発達は恐らく、死に至るまで続くものであったでしょう。しかし、洗礼を受ける時にイエスにとって、マリアの子であり、大工であるということよりも、または、ナザレの住民であり、ユダヤ人であるというよりも、神の子であるという自分の身分が重要になっていたので、イエスは神から与えられた使命を果たすために、マリアのもとから、と同時に自分の仕事と安定した生活から離れることができましたし、ナゼレから追い出されても、他のユダヤ人から異端者として見下されても、この活動を続けることができましたし、最終的に父である神から与えられたこの使命を最後まで忠実に果たすために、辛い受難と残酷な死を受け入れることができたわけです。

イエスの父と神の国

　イエスが神の子に相応しい生き方を知っていたのは、神が父であるということがどういうことかを知っていたからです。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」（ヨハ 15,9）と言うことによってイエスは神の愛をご自分の体験から知っていたということを示しています。イエスは父である神の愛を知っていたからご自分の弟子たち、またはご自分に対して敵意を持っていた人やご自分を苦しめ、十字架に付けて殺した人を愛することができたのです。その意味では、父である神の愛がイエスご自身の愛の源であったということが言えると思います。イエスは神の愛を体験していたから、イエスにとって神は何よりも「アッバ」、即ち「愛する父」でした。神は創造主として命の源であり、または世界の絶対的な支配者としていつもご自分が創造されたものを治め、導いてくださるという意味だけで父であるのではありません。神

が父であるということは、神がわたしたちの善だけを求め、いつもそばにいて、いつも支え、守ってくださり、人間に命だけではなく、ご自分の愛も注いでくださるという意味です。人間は、このような父である神と親しい愛の交わりのうちに生きることができます。しかも、この交わりは永遠に続くものであって、人間と神と完全な一致をもたらすものなのです。イエスは、ご自分の体験に基づいてこのような実感と確信をもつようになり、そしてそれについて語っただけではなく、それをご自分の生き方や神に対する態度によって示してくださっていました。

神のことを「アッバ」と呼ぶことによってイエスは、神に対する最大の愛を示したとともに、小さい子供が自分の親に対して抱いているような、何の疑いもない信頼とその信頼に基づく絶対的な従順を示していました。このように神を愛し、神に信頼していたイエスは、ご自分の命を神である父に完全に委ね、神と親しい交わりの内に生きていました。そのため、悪霊の誘惑、親類の誤解や親しい友の裏切りであっても、激しい迫害、死に至る残酷な受難であっても、それらはイエスを父である神から引き離すことができませんでした。イエスの人生は神の愛に対する完全な応えになり、イエスが本当に神の愛する子であるという事実の完全な表現になりました。イエスは人間の心で愛していましたが、父である神と深く結ばれたことによって、イエスの人間の心が神の愛によって満たされていました。それ故、イエスは愛に生きることによって、神ご自身の愛を現わしていたわけです。

神がすべての人々にご自分の愛を与え、この愛によって全ての人々を結び、神の大きな家族にすることは神の最も大きな望みであって、神が人類を創造してくださった目的であったということをイエスが知った時から、神のこの望みは、イエスの最も熱心な望みとなり、それを実現することがイエスの使命と人生の目的となりました。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。」（ルカ 12・49）と語ったイエスは、ご自身が神に対する愛によって燃えていたように、すべての人々もこの愛によって燃えるようになることを求めているということを宣言し、人々の心の中に神に対する愛の火を付けることが自分の使命であり、この世に生まれてきた目的であるという確信を示しています。

すべての人々が愛の絆、しかも永遠に解かれることのない絆によって神と互いに結ばれているという現実は、イエスにとって人類のための大きなビジョン（未来像）となりました。イエスが出会ったすべての人々に対して愛を実践したのは、この人たちを少し助け、彼らの苦しみを一時的に和らげるためであっただけではなく、何よりも神の愛を現わし、この愛によって人々を神のもとに

引き寄せることによって、このビジョンを実現するためでした。このビジョンの実現がすべての人々にとって最高の善、最高の幸福であると知っていたイエスはそのために、ご自分が持っていたすべてのものをかける覚悟やあらゆる苦痛を受け入れ、ご自分の命さえも犠牲にする覚悟を持っていました。イエスはこのビジョンを「神の国」と名付けましたが、教皇ヨハネ・パウロ二世が現代人の感覚に合わせてそれを「愛の文明」と呼んでいました。

　イエスは、ナザレでの静かな生活の中で、何かの奇跡的な出来事や特殊な修業によってではなく、一般的な家庭の生活、毎日の仕事とユダヤ人としての誠実な生き方によって、即ち、日常的で小さなことにおいて神のみ旨を果たすことによって、神を、愛する父として知りました。おそらく、そのような体験に基づいて、イエスは「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である」（ルカ 16･10）と教えたでしょう。イエスが普通の生活の中で神の愛を体験し、ご自分が神の愛する子であるという身分を知るようになり、この愛の内に成長することによって、最後まで愛することができたことを見て、誰でも、イエスと同じように愛することができるということが分るはずです。というのは、すべての人々が神によって愛されているし、すべての人々がこの愛を体験し、この愛を受け入れ、この愛に成長することができるのです。ところがイエスのように愛することはすべての人にとって可能なものであっても、殆どの人々がその可能性を生かしていないというのは現実です。次の章にはそんな現状の理由について考えてみたいと思います。